

第 173 回広島ユネスコサロン

～オバマ大統領と対面した日～

歴史研究家 森 重昭さん

3月3日（土）於 アステールプラザ



今回は、2016年5月、オバマ米大統領（当時）の広島訪問に際し、広島平和公園でオバマ大統領のスピーチに立ち会い、会場で対面・抱擁した、歴史研究家の森 重昭（もり しげあき）さん（80）を迎えて、お話を伺いました。

森さんは講演で、「オバマ大統領と対面した日」と題して、広島市内で被爆死した米国捕虜兵12人の追跡調査・研究に取り組んできた貴重な体験を中心に、話を進められました。オバマ大統領の広島訪問に際して森さんは、東京のアメリカ大使館から、電話で「オバマ大統領の広島への献花式に出席されますか」との招請があり、式では大統領と抱擁。これまでの苦労を深く理解してもらったと思い、「光栄に感じ嬉しかった」と、声を詰まらせながら感想を語られました。

森さんは、8歳の時被爆。以前から「あの当時、国民学校に火葬処理で運び込まれ、焼かれた遺体の多さからして、地区の実際の犠牲者は、市が発表している数より、もっと多いのでは」との疑問が消えず頭の隅に残っていた。

それで1975年、38歳の時、思い立って会社の広島勤務の傍ら、自ら近所の知り合いを回って、地域の被爆状況を調べ始めたのがきっかけとなり、「原爆犠牲者の中に、米兵捕虜がいたことが分かりました」。

さらにNHKが募集した原爆の絵2, 200枚余りの中から、「米兵を描いた絵」20数枚を探し出し、作者を訪ね、「12人の米兵捕虜が原爆死していたこ

とを突きとめました」と、そのいきさつを話されました。以来、米国への国際電話を頼りに遺族探しに明け暮れ、やっと12人の遺族全員を探し当てた。また爆心地近くの米兵捕虜収容所跡地の場所には、個人で慰霊の記念碑を設置するとともに、これまで不明扱いにされていた米兵捕虜を日本人、韓国人死没者と同じように、「原爆犠牲者の名簿に登録し慰霊したい、という長年の願いと苦労が実を結び」、2002年に平和公園の国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に、米兵の写真と名前を届け出すこともできた、と長く険しかった道のりを振り返られました。

森さんはそのほか講演で、戦後の広島市の発展の基となったのは、憲法95条に基づく「国の特別法（広島平和都市建設法）の施行」と、「被爆者援護の支えとなった原爆医療法の制定」に負うところが大きいとし、さらに平和のために「全財産・全人生を傾けて尽くされた立派な方々」の足跡を紹介され、決して忘れてはならないと強調されました。

また森さんは、「これから何をされるんですか」とよく聞かれるが、「私は、これまで長崎で被爆死したオランダ人、イギリス人捕虜兵の身元を明らかにしてきましたが、これからも犠牲となったオーストリア人捕虜の調査・研究を、さらに進めていきたい」と決意を述べられました。

この日集った市民、協会員約70人は、森さんの原爆死した外国人捕虜兵の調査・研究にかける取り組みに終始、緊張の思いで聞き入っておられました。

森 重昭さん 1937年
3月29日生まれの80歳
原爆投下時は8歳で、広島市西区己斐の国民学校へ登校中に爆心地から約2.5キロの地点で被爆。東京の大学を卒業後、証券会社を経て大手楽器メーカー広島支店に勤務。

